

## ◆講座の概要

2016年10月5日から11月9日にかけて、龍谷大学世界仏教文化研究センター提携講座「仏教人間学—無明を照らす道—」が、龍谷大学深草学舎紫光館で開催された(受講生：40名)。

本講座では、「社会」「動物」「自然」「災害」「科学」を各回のキーワードとし、仏教における人間観を考察し、我々の無明を照らす道を受講者とともに探った。講座は、全5回の講義から構成され、第1回の講義を金澤豊(本センター博士研究員)、第2回講義を大澤絢子(本センターリサーチ・アシスタント)、第3回講義を李曼寧(本センターリサーチアシスタント)、第4回を唐澤太輔(本センター博士研究員)、第5回を亀山隆彦(本センターリサーチアシスタント)が担当した。当初、第1回を亀山が担当する予定であったが、台風による休講となったため、第5回に振替となった。各講義の内容は、以下に述べる通りである。

## ◆各講義の内容

### 第1回講義「人間と災害—仏教者による社会貢献活動—」(講師：金澤豊)

戦前の物理学者、寺田寅彦の論考「津波と人間」をはじめに取り上げた。災害を防ぐには「人間がもう少し過去の記録を忘れないように努力するほかにないであろう」という寺田の言葉は、科学技術の進歩した現代に於いても変わりなく有用であることを指摘した。南海トラフ地震の被害想定も積極的になされている現代は、改めて自然災害に際して何ができるのかを考えざるを得ない時代であり災害に備え、災後「何をなすべきか」は、私たちが今考えるべき問題であると提案した。

その際に、私たち自身のあり方を示す仏教用語「無明」を理解しておくことは有意義であることを述べ、無明理解の変遷を①原始仏教②大乘仏教③親鸞の理解の順に説明した。その上で、いわゆる既存の社会貢献活動への問い直しを行うために、特に災害時における仏教者独自の役割は何かを問いかけた。講師の取り組んでいる仮設住宅訪問活動を紹介し、苦悩を抱える人の話を聞くことの意義、有用性と普遍性を提示し、仏教者の社会貢献の一例を示した。その活動の動機と目標、活動者の支えとなっている仏典の言葉を紹介することで仏教と現代社会との結節点を呈して、無明を照らすものは仏語であることを提言し講義を終えた。

### 第2回講義「人間と自然—語られた親鸞像—」(講師：大澤絢子)

本講義では、親鸞における自然(じねん)をめぐる問題に注目し、親鸞の思想およびそれにまつわる語られた親鸞像を扱った。

自然とは本来、人間の介入することのないモノや状態を指すが、親鸞における自然(じねん)とは、人間のはからいを超えた阿弥陀仏のはからいによる救いであり、「必ず」という必然性を伴ったものとして捉えられている。親

鸞にとって自然とは、如来のはたらきによって衆生が必ず救われることを指しており、この言葉には、如来の本願による救いを確信した親鸞の思考が明確に現れている。

一方、『恵信尼消息』で語られている親鸞は、病床において『浄土三部経』を千部読もうとして中止し、抜き難い自力への執心を痛感している。また自身も和讃のなかで、自力修善は虚仮の行だと知りながら、なおも修善に心動いてしまうわが身を懺悔しつつ、無漸無愧のこの身そのままを救う阿弥陀の慈悲に感謝している。

このように親鸞には、如来のはからいを確信しながらも、それでもすべて委ねることに自ら迷うという、人間らしさもうかがわれ、その上で親鸞はあらためて如来のはからいの有り難さを受けとめているのである。こうした語られた親鸞を通して、親鸞の思想に対する理解を深めていく道もあることを本講義の結びとした。

### 第3回講義「人間と動物—仏教観から見る矛盾と調和—」（講師：李曼寧）

「ペット遺棄」「動物虐待・虐殺」などの社会問題の裏には、「動物は人間より劣る存在である」という考え方がありようである。しかし、動物は本当に人間より劣る存在であろうか？動物に対し、人間はどう接するべきであろうか？

これらの疑問をめぐって、本講義は、まず、導入として鴨長明『発心集』巻二第三話「内記入道寂心の事」の一部を取り上げ、仏教の根本的思想——「輪廻」「因縁」「慈悲」について簡単に説明した。

仏教の世界観によれば、動物＝畜生は、人間と同じく罪業によって六道（原始仏教では五道説）の中で輪廻している衆生である。畜生は、知能の制限などによって、成仏する可能性が人間より低く、三悪道に帰される一方、「一切衆生悉有仏性」が説かれるように、成仏の性質を持っている点では人間とは同じである。

成仏の可能性の高低だけを見ると、動物は人間に劣るように見えるかもしれないが、そのことだけによって動物を見下してはならない。『龍大はじめの一步—龍谷大学の「建学精神」—』の一節に書かれているように、「ブツダ（仏）には、すべての違いを認め慈しむ眼があり」、この「眼をいただいてみた時、各々の「いのち」がそれぞれの特徴を持ったままに光り輝いている世界が見えて」くるのである。

### 第4回講義「人間と科学—こころのゆくえ—」（講師：唐澤太輔）

近年、科学技術は、人間の力を凌駕しはじめ、コントロールできないほど危険なものになってきている。講義では、まず、西洋科学技術の背景にあるロゴスの論理（分析的・分断的思考）が解説された。続いて、仏教の伝統の中で発達した別種の考え方＝レンマの論理（直観的・同時的思考）が解説された。

その後、①インターフェイス、②「心（意識）」と「物」の根源たる「こころ」、③融通無礙をキーワードにしながらか、科学技術、特に原子力発電技術の

問題点が洗い出された。原子力発電技術の最大の問題点は、生態圏外の核エネルギーを、ゆるやかな媒介なしに、直接、生態圏内へもちこむことである。そして、そのような技術の奥に「一神教的思考」があることが述べられた。一方、例えば、古来、人間の住む領域と自然との中間領域である里山などを重視してきた日本人は「つながり」の大切さを、その心身に刻み込んできた。重要な事柄は、切り離す(分断)するのではなく、緩やかに変化させる中間領域をどうデザインするかである。

最後に、新しい科学の可能性は、ただ対象を分断し分析するのではなく、自己と他者との間の「つながり」「交感」に目を向け、個々を包み込む根底的な場を考えるとこころにこそあるとして、講義が締めくくられた。

## 第5回講義「人間と社会—仏教における愚痴と暴力—」(講師：亀山隆彦)

ドイツの文芸・社会批評家、哲学者のヴァルター・ベンヤミンによれば、人間の社会生活を律するとされる「法」は、根本的に暴力的な存在である。本来、法は権力によって無根拠に措定・維持されるもので、支配の為の根源的な暴力、すなわち「神話的暴力」以外の何ものでもない。ベンヤミンは法と暴力の問題に関して、自身の論文「暴力批判論」の中、上記のように喝破する。その一方で、この「神話的暴力」を乗り越える方策として「神的暴力」を提唱する。同じくベンヤミンによれば「神的暴力」は、あらゆる面で「神話的暴力」とは正反対の、法を廃棄し罰を除去することが出来る「一瞬の衝撃」、無血かつ致死の力を持つ「暴力」である。

本講義では、先ずベンヤミン「暴力批判論」の実際の記述に沿って、彼が提唱する「神話的暴力」、すなわち法と暴力の関係がいかなるものか確認した。その上で、引き続き「神的暴力」の解釈に進み、「神話的暴力」を超克する上で極めて重要な存在とされながらも、その具体相が明確にされない点を指摘した。最後に、それら検討の結果を踏まえて、仏教が説示する「八正道」や「慈悲」、あるいは「不殺生」(ahimsā)といった行いが、そのままベンヤミンのいう「神的暴力」となりうる可能性を論じた。

## ◆全5回の講義を通じて

本講座は、前期の「聖地をめぐる—説話・密教・夢—」に続く連続公開講座であった。40名の定員は満員となった。全5回を通じて、受講生は毎回非常に熱心に講義を聴講していた。講義中もしくは講義後に、受講生から質問が多々あり、講師もそれらに真摯に答える努力をした。それぞれ専門分野の異なる五名が、コンセンサスを取りながら講義を行うことは、なかなか難しい点もあったが、事前に綿密な準備を行い、また詳細なレジュメやパワーポイントなどを用いて講義を行った結果、各回、大変密度の濃い時間を受講生に提供することができた。

以上